The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

印度學佛教學研究第五十八巻第一号　平成二十一年十二月

存覚『歩船鈔』と十宗
―仏教概論としての構想―

龍口恭子

はじめに

暦応元年（一三三八）存覚が四十九歳の時、備後では真宗門徒と法華宗との対立が深まり、乞われてこの地に赴いた存覚が論陣を張り、守護の前で相手方を論破したことが、

四十九歳暦応元、三月、於備後国府守護前、与法花宗対決了、御門弟依望申、忌其憚、改名字号悟一出対了、法花衆屈、仍当方弥繁昌、…

『常楽台主老衲一期記』（真宗史料集成　第一巻　八七三頁）

と記されている。これによって存覚の教団における名望が高まった。それは存覚の父覚如をも動かし、義絶を解くという結果をももたらしたのである。

この時、存覚はこの備後の地に三月から七月まで滞在し、この地で布教している真宗僧侶達から執筆を所望された。決智鈔（慶空）・法華問答（願空）・報恩記（願空）・至道抄（空暹）・選択註解抄（慶願）・顕名鈔（明光）・歩船鈔（慶空）等である。これらを僅かな年月の間に次々と書き上げている。それらは親鸞の『教行信証』のように大部の組織的なものではないが、それぞれに典拠のある綿密な構成を持ったものであり、単なる思いつきや、筆のすさびといったものではない。恐らく存覚が長い間温めて来た構想を定着するために、備後の宗徒達の所望が起爆剤となって一挙に著作へと実らせたものと思われる。

本稿では、これらのうち『歩船鈔』に焦点をあて、そこに述べられている十宗を中心とした真宗教義の解釈の特徴を解明して行きたい。

一　存覚における著作の執筆意図

本書は存覚が備後山南の慶空の要望に応えたものであるが、存覚の数々の著作の執筆意図を考えてみたい。存覚の『浄土真要鈔』『諸神本懐集』『六要鈔』等の識語によれば、次のようなものがあげられる。(1)

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

1、読み手にとって平易、詳細なものを心懸ける。
2、流布した書物を整理する。
3、相伝の書物を作成する。

たとえば、1については、『浄土真要鈔』には、「そもそもこのふみをしるす起こりは」（原文片仮名。私に漢字に改めた。）と、了源に書き与えた動機を記して、『浄土文類集』という一門に伝わる書に「平生業成」「不来迎」という語が見えるが、

しかるに、その言葉詳しからざる間、要文を添へ、重ねて料簡を加へて記し与ふべき

（「存覚上人識語集」『仏教大学論叢』第二四三号　一四九頁）

と所望があった由縁を記している。さらに、

文字に疎からん人の心得易からんことを先とすべき由、本主の望みなる故に…

と、平易を心懸け、易しい言葉、一々の訓釈を施した旨を述べている。

親鸞没後、六、七十年経ち、一門の中で親鸞の遺作の伝写や、遺語の伝写が重なるにつれて、その整理・吟味・解釈が必要になって来た時代背景を伺わせている。

二　八宗・十宗

さて『歩船鈔』はその名の如く龍樹の難行道・易行道を立てながら、その具体相は日本仏教における十宗の教義的特質と各宗の念仏との関連、及び他力念仏の勧信となっている。『歩船鈔』では「八宗」「十宗」の語が次のように使われている。

各々有縁の教によりて修行せば、すみやかに解脱をうべきなり。そのなかに四家の大乗といふは、法相・三論・華厳・天台なり。このほかに真言・倶舎・成実・律宗をくはへて八宗とす。また仏心宗をくはへて九宗とす。また浄土宗をくはへて十宗といふべし。これ日本に流布せる宗なり。これらの諸宗みな一仏の所説よりいでて、ことごとく無上菩提にいたるべき門なり。

（真聖全　三―二二一頁）

この見解は存覚が正中元年（一三二四）、三十五歳の時に了源の求めに応じて著した『持名鈔』においても同様である。翻って真宗の宗祖親鸞についてみるに、「八宗」「十宗」の語は見られず、その師法然の『選択本願念仏集』に、

問て曰く、夫れ宗名を立つることは、本、華厳・天台等の八宗・九宗に在り。未だ浄土の家に於て、その宗名を立つることを聞かず。

（真聖全　一―九三〇頁）

とある。また「八家」の名も、同じく『選択集』に見える。即ち新しい宗を立てた法然において、宗という概念は重要であったが、親鸞においては、必ずしもそうでなかった。ただしこの「八宗」「十宗」の概念は基本的には教相判釈をもとに立てられたものであるから、親鸞においても無関係ではない。しかし親鸞の教判においては、これも存覚の『六要鈔』

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

によるものであるが、「二雙四重」を立てていて敢えて用語としては提示していないと言ってよかろう。

存覚の父覚如の『口伝鈔』には「京中に八宗兼学の名誉まします智慧第一の聖人の貴坊やしらせたまへる」とあり、また同じく『口伝鈔』には「八宗兼学の了然上人」とあり、「八宗」という語は日本仏教の代名詞ともいうべきもので、また「八宗兼学」は仏教を修めた人の敬称といえる。覚如の『改邪鈔』には「八宗の高祖とあがめたてまつる龍樹菩薩の所造」とも使われ、龍樹の別称ともなっている。

だが存覚の時代に入って他の宗派においても、八宗・十宗を取りあげて優劣を論じたもの、伝法の歴史を叙述したものが多くなる。それはこの時代、鎌倉中期には八宗・十宗を問題としなければならない事態が起こって来たということであろう。

三　三学と八宗

法然は十三歳で比叡山に上り、十八歳の時黒谷叡空の門下となり、さらなる精進を目指して、京洛、南都に遊学、爾来二十五年、黒谷に帰るに及んで、聖光の『徹選択本願念仏集』には、

凡そ仏教多しと雖も、所詮は戒定慧の三学に過ぎず。所謂る小乗の戒定慧、大乗の戒定慧、顕教の戒定慧、密教の戒定慧なり。

『徹選択本願念仏集』（浄土宗全書　第七巻―九五頁）

と仏教を規定し、翻って我が身にあて、自らを「三学の非器」と規定したところから、善導への参究が始まるのである。

これら「三学」を修する「八宗」は僧侶が本来修行・学問すべきものであった。『漢語燈録』に収められた『浄土初学抄』（真聖全　四―五二六頁）は念仏往生を勧める天台宗・法相宗・三論宗・真言宗の内で、どの部分が念仏往生の思想を述べるかについての前半、華厳宗・天台宗・三論宗・法相宗・地論宗・摂論宗・大乗律宗・真言宗・成実宗・倶舎宗・四分律宗の宗義を述べる後半部分とからなる。その趣旨は、念仏について廃立の立場を明らかにすることにあり、『選択本願念仏集』が「捨閉閣抛」によって念仏信仰を明確にして行ったように、『浄土初学抄』でも、十一宗について、それぞれの宗派が念仏についてどのような立場をとっているかを明らかにし、殊に否定的な部分をあげる。

四　十宗に言及した書の検討

鎌倉時代後期、存覚の時代には「八宗」「十宗」に言及した書が多くなって来る。(2)

円爾『十宗要道記』・凝然『八宗綱要』・凝然『内典塵露章』・凝然『三国仏法伝通縁起』・痴兀大慧（ちこつ）『枯木集』・虎関師錬『八海含蔵』等である。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

たとえば凝然の『八宗綱要』では、

以前列ぬるところの諸宗の次第は、是れ浅深の次第にあらず、唯言に随って列ぬるのみ、何れを列ぬるも得べきが故に、且く上の如く之を列ぬるのみ。人身聖教、受け難く値い難し。適ま受値することを得たり。豈黙示するを得んや、仍て管見を挙げて以て来縁を結ぶ、微功朽ちずんば、必ず菩提を証せん。

『八宗綱要』（講談社学術文庫　四三九頁）

と述べ、諸宗に浅深の相違はないことを強調していて、教義内容を客観的に分析し、『三国仏法伝通縁起』においても伝法の経緯を歴史的な面で詳述する。また虎関師錬『八海含蔵』も簡略に八宗についてまとめている。

一方、大慧の『枯木集』は、

十宗皆是済度の方便也。いづれも実の仏法にあらず、しかるに各々自ら習ふ所の法を実の仏法と思て、他のならふ所を仮なりと思へり。是によりて…たがいにそしりたがいにほこれり。

『枯木集』（国文東方仏教叢書　第三巻―一九八頁）

と、宗派相互の争いを戒めている。

禅宗の東福寺を開創した円爾は、真言・天台にも通じ、後に東大寺大勧進職も務めたが、『十宗要道記』に、

涅槃経云、門々但是涅槃一法。勿於一法中生是非、自法愛染故毀呰他人法、雖持戒行人不脱地獄苦、

『十宗要道記』（『禅宗』第二一〇号　二頁）

と、宗派同士で利権を争い、議論のための議論を繰り返す情勢へ警告を発している。

以上のように八宗・十宗を論じたこれらの書が著述されたのは、従来の八宗に加えて、仏心宗（禅宗）・浄土宗の台頭も加わって、他派との相克の中から自派の正統性を強調しなければならない状態があったことによると言ってよかろう。

五　『歩船鈔』の著作意図

以上「八宗」「十宗」の語をキーワードとして、法然以降の宗派仏教について考察し、『歩船鈔』の著作意図を明らかにすることを試みた。

存覚は暦応元年、備後において真宗僧侶、慶空から所望されて著をなしたが、存覚の生きた時代鎌倉時代後期、僧侶は、自身が「戒」を持ち、「定」を修し、「慧」を学ぶ、即ち、戒・定・慧の三学を勤めとした。これは覚りを目指して励む出家者としての本分を尽くすものである。日々の生活もこの三つの実践であり、「十宗」の解釈も、それに沿ったものであった。そのような厳しい修道の過程で、宗派の対立を生むこともなった。

一方、存覚においては、「十宗」は、これら戒・定・慧の範疇に入るものであったであろうか。存覚の奉ずる真宗においては、「他力の信」の立場から言えば、これら戒・定・慧は僧侶が覚りを得るために修する必要はないものである。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

何故ならば、他力の念仏においてはそれらの行は僧侶が修してその結果として覚りを開くべきものではなく、真宗においては成仏の行は「如来より賜はりたる信心」（『歎異抄』第六条）であり、ただ信受すべきものである。よってこれらの三学は僧侶が行として行うものではない。

しかれば真宗の僧侶は何をするのか。親鸞の教義に従えば、真宗僧侶の存在意義は教えの宣布である。

存覚が備後の国で教えを弘めていた慶空のために、『歩船鈔』を著したのは、慶空の立場に立つものであった。[3] 即ちあらゆる階層、信仰を持つ人々に対して、親鸞の教えを弘めるためには、その人々が納得できる理論的根拠を示す必要があった。その一つが、十宗の構造であったのである。その条件を満たすものとして、各宗の教義の概要、相伝の歴史を述べた。そして最終的には、弥陀一仏への帰依を勧めたのである。

1　宮崎圓遵「初期真宗における門徒名帳の一例」（宮崎圓遵著作集　第四巻　所収）。

2　島地大等「十宗要道記及び八海含蔵について」（『教理と史論』一九三一年一一月刊）。

3　谷下一夢『存覚一期記の研究並解説』（一九四三年二月刊）。

〈キーワード〉　存覚、歩船鈔、八宗、十宗

（東方学院講師）

新刊紹介

静　慈圓

『空海の行動と思想
—上表文と願文の解読から—』

A五版・二八二頁・本体価格二、八〇〇円
法蔵館・二〇〇九年三月

NII-Electronic Library Service